

アフリカとわたしたち

貧困や紛争、戦争、水や食糧などの不足、そして大企業や先進国による資源争奪——。アフリカのさまざまな課題は、いままも深刻であり、その多くは解決の途上にあります。これらの問題に、日本はどのように関わってきたのでしょうか。そのプロセスで、アフリカの人びとの暮らしや考え、本来の豊かな文化に私たちはどれだけ直にふれてきたのでしょうか。このクラスでは、日本と国際社会がアフリカにどう向き合ってきたかを検証するとともに、アフリカと日本のつながりを改めて考え、切り結びます。2013年6月に横浜で開催される「第5回アフリカ開発会議(TICAD)」も一つの機会として、アフリカを学び、日本との関係、そして市民社会を考えましょう。

- 2013年6月～11月
- 基本的に隔週木曜日 19:00～21:00
- 全10回/定員30名
- 受講料：28,000円

6/20

オリエンテーション

アフリカは貧しいのか？ わたしたちは豊かなのか？

勝俣 誠 (明治学院大学経済学部 教授)

アフリカは植民地期から世界経済の景気変動に合わせて「資源争奪の大陸」となったり、「チャリティの大陸」になったり、外部から一方的に規定されてきました。講義では何よりも、アフリカの人々の自らの尊厳をかけた戦いによる「人々が変わる大陸」の現状分析を試みます。『新・現代アフリカ入門 人々が変わる大陸』をテキストに使用しますので、予習をオススメします。

●主著：『新・現代アフリカ入門 人々が変わる大陸』岩波新書 2013年4月刊予定 ●参考文献：勝俣誠『脱成長の道 分かち合いの社会を創る』(共著)コモンズ 2011



7月

検証！ TICAD (アフリカ開発会議)

— 国際社会はアフリカとどんな支援と関係をつくってきたのか

講師交渉中

「アフリカ開発会議」(TICAD) は1993年に始まった国際会議で、日本はそこでさまざまな役割を果たしてきたといわれます。2003年6月・横浜でのTICAD後のこの回では、これまでの取り組みはもちろん、会議で何が話され、どんな声があつたのかから出されたのか、また国際社会がアフリカに「関わる」とはどんなことなのか、実際にTICADに関わる専門家からお話をうかがいます。

7/18

「援助」はアフリカの人びとを 幸せにできたのか？

— 開発・援助機関と国際社会の支援を検証する

稲場 雅紀 (『動く→動かす』GCAP Japan) 事務局長 / (特活) アフリカ日本協議会 国際保健部門ディレクター)

2000年以降、国際社会の援助潮流は大きく変化し、「貧困削減」を大きく掲げ、援助国・機関による協調も積極的に行われている。「援助」は本当に変わったのか。市民社会の立場から検証する。

●共著：『流儀 アフリカと世界に向かい我が邦の来し方を振り返り今後を考える二つの対話』生活書院 2008/『対テロ戦争』と現代世界』木戸衛一編 御茶の水書房 2006 ●参考文献：『動く→動かす』編『ミレニアム開発目標 世界から貧しさをなくす8つの方法』合同出版(合同ブックレット2) 2012



8/1

紛争はなぜ起こるのか、 国際社会はどう向きあってきたのか

— 国家、民族、介入

武内 進一 (日本貿易振興機構(ジェトロ)・アジア経済研究所)

アフリカの紛争は、アフリカと私たちとの関係についてさまざまなことを教えてください。ルワンダやコンゴ民主共和国、マリなどの事例をもとに、アフリカの国家と民族、そして国際社会の介入について考えます。

●主著：『現代アフリカの紛争と国家 ポストコロニアル家産制国家とルワンダ・ジェノサイド』明石書店 2009/『戦争と平和の間—紛争勃発後のアフリカと国際社会』(編著)アジア経済研究所 2008 ●参考文献：『アジア研ワールド・トレンド』2012年10月号(特集：不安定化する「サヘル・アフリカ」)(ウェブにて公開) / 藤原一・大芝亮・山田哲也編『平和構築・入門』有斐閣 2011



9/13 (金)

ソマリア「海賊」対処と ジブチ自衛隊基地設置

— その植民地主義的な性格と「平和主義」の危機

高林 敏之 (日本アジア・アフリカ・ラテンアメリカ連帯委員会 常任理事)

ソマリア「海賊」問題を利用した、国際警察行動の法制化とジブチへの自衛隊基地の設置。「悪」との対決を大義名分に「平和主義」を崩壊させる動きを検証します。

●主著：『トラウマの記憶の社会史 抑圧の歴史を生きた民衆の物語』(共著)明石書店 2007/『ハンドブック 現代アフリカ』(共著)明石書店 2002 ●参考文献：高林敏之「『ソマリア海賊問題』を生み出したもの あるいはアフリカで奏でられる『帝国復活』のファンファーレ」『歴史学研究』第862号 2010年1月



9/26

コンゴ民主共和国 鉱山開発・土地・資源と暴力

ムケンゲ ジャイ・マタタ (オリエンタリズム研究所 所長)

コンゴ民主共和国は、隣接国の武装勢力による資源強奪など鉱物資源の問題がクローズアップされている。それともなうITとの関連、女性や子ども・高齢者への暴力などの人権問題について考察したい。

●参考文献：米川正子『世界最悪の紛争「コンゴ」 平和以外に何でもある国』創成社 2010
Alain Deneault, Noir Canada. Pillage, corruption et criminalité en Afrique, ed. écosociété, 2008



10/10

“アフリカ”の伝えられ方

— 日本における報道

ウィリー・トコ (東京大学大学院 学際情報学府博士課程学際情報学専攻)

先進国のメディアが産み出している「新マザー・テレサやマッカーサーたちは「アフリカ」を救えない。アフリカの人びとが、日本を含む先に「進んだ国」の「いいところ」をしっかりと認識し、消化しない限り、援助などは「牛乳一気飲み逆効果」を起こし続けるに違いない。

●参考文献：石弘之『子どもたちのアフリカ 〈忘れられた大陸〉に希望の懸け橋を』岩波書店 2005/山崎武也『お金の使い方わかる男の器量』PHPエール新書 2002



10/24

映像や文化をつうじて学ぶアフリカ 人びとの運動

津山 直子 (NPO法人アフリカ日本協議会 理事/関西大学 客員教授)

アフリカの人びとによる運動、私たちと共通する課題、理解・連帯・協働していくことなどを映像を交えながら一緒に考えていきたいと思います。

●共著：『南アフリカを知るための60章』明石書店 2010/『動く→動かす』編『ミレニアム開発目標 世界から貧しさをなくす8つの方法』合同出版(合同ブックレット2) 2012

※「12. テレビが伝えない世界の真実」クラスと合同



11/7

世界最貧国のエチオピア、 豊かだが閉塞する日本

— エシカル・フェアトレードの社会的企業でつなぐ

鮫島 弘子 (andu amet 代表取締役)

andu amet は、羊皮のなかでも世界最高峰であるエチオピアン・シープスキンを使った、エシカル×リユクスなブランドです。皆さんと事業についていろいろなお話をさせていただきたいと思っています。

※エシカル×リユクスとは、倫理的であり、かつぜいたくで優雅な、という意味です。



11/21

アフリカの人びととつながるために

— 貧困と自立のために、私たちは何を「すべき」でないか

船田 クラーセン さやか (東京外国語大学大学院地域文化研究科 准教授)

私たちとアフリカの人びとのかかわり、連帯を阻むものとは何か。私たちの意識や行動に内面化された「豊かさ」「貧しさ」「援助する側」「される側」という規範を取り除き、ともに考える回路を見出そう。

●主著：『アフリカ入門 ポップカルチャーから政治経済まで』明石書店 2010『モザンビーク解放闘争史 「統一」と「分裂」の起源を求めて』御茶の水書房 2007

※事例として、現在モザンビーク北部農村部で日本とブラジル政府が進めるプロサバナ事業を検討対象とします。事前にブログ (<http://afriqclass.exblog.jp/438>) で資料を読んでおいてください。

